も、決して體制としてただちに是認されたものではなく、寧ろ政治的便宜の上のいわば必要惡とされたのではないだろうか」（板野正高「中國沿岸における貿易と外交」、J・K・フェアバンク著・書評『アジア研究』一ノ二）とのべられ、西洋の衝擊がもたらした條約體制につき、それに對應した中國官人の行動樣式を從來の傳統的制度發展の過程としてではなく、西洋のコロニアリズムに對する≪ナショナルなもの≫として把握されようとしている。但、著者の場合、その≪ナショナルなもの≫は、あくまで西洋のもたらした條約體制に對應する中國側の受動的側面にのみ視點があり、その對應を通して中國側が模索した自立的姿勢が捨象される傾向がありはしないか。「一視同仁」に基づく傳統的朝貢外交が打擊を受け、國際法に基づく合理的外交にきり代っていく過程を通して、侵略のヴェールをかぶった列强の外交といかに對處していくかが中國近代外交史の課題であり、その主體となり得たのは、中國の實態を適確に把握しナショナル（民族主義）の立場にたって中國外交の新たなる展望をきり開くことを主張し得た一部の憂國の士以外にあり得ないのではないか。陳天華がかの「猛回頭」の中で中國の瓜分の危機を訴え、現政權を洋人の朝廷であると見破り、漢民族による主權國家の建設を主張し、それが孫文等の國民革命の精神に受けつがれていくそこにこそ近代外交史の主題があるのではないか。筆者は外交史研究の全くの素人であり、著者の論文より多くのものを學ばせていただいた。吾國の近代外交史研究は、戰前、矢野仁一氏が『近代支那外交史』という勞作を發表されて以後、植田捷雄氏の『東洋外交史概說』等數篇を除いてこれといった好著がなかった。その點、著者が本書を公表されたことは、外交史研究にきわめて貴重な意義をもっている。今後、著者を始め多くの研究者が外交史の分野において益々實りのある研究をされることを期待するものである。本書の解說に當って或いは著者の眞意を解さず論旨を誤解したのではないかと恐れている。御寬恕を乞う次第である。

（大谷敏夫）

The Annals of Kokonor

Ho-Chin Yang

Uralic Altaic Series,
Indiana University Publications Volume 106,
Indiana Univ. Press 1969, 125 pp.

チベット史の流れにおいて、十七世紀前半におけるダライラマ政權の成立は劃期的な事件であった。その主役を演じたのは「偉大なる五代」と稱せられた第五代ダライラマであり、この政權樹立へのプロモーターとなったのはジュンガリアから青海へと移駐したホショト部の部長グシカーンであった。政局變動の歷史的經過については、當然この二人の事蹟への追求が必要となるのであるが、ダライのそれについてはその傳記（東北目錄 No. 5589）の中に若干の記述はある。しかしグシカーンについての傳記は成書としては全く存在しない。もとより第五代ダライの撰した佛教史「ゾグデンションヌゥガトン」Rdsogs ldan gshon nu dgah ston（東北目錄 No. 5664）、スンバケンボの佛教史「バグサムジョンサン」Dpag bsam ljon bzan などにグシカーンの事蹟は記されていないわけではな

い。しかしそれもまた簡單な記述だけで、我々は到底それを以て滿足するわけにはゆかなかった。このような場合には隣邦中國の記錄が、時として非常に利用價値があるのであるが、ちょうどこの十七世紀前半は明淸鼎革の際に當り、明・淸いずれの側にも充分な記錄は殘されていないのである。淸の太宗・世祖の時代にグシカーンが使を盛京・北京に遣わしたことは記錄に見えているが、それは單なる遣使の事實だけで、何等青海・チベットの政局說明の材料にはならない。いわば、この時期、この地域の情勢の變動はチベット史上最も扱いにくい分野の一つだったのである。

ところがこれに一道の光明を齎す文獻が最近現れた。スンバケンボの著「青海史」Mtsho sñon gyi lo rgyus sogs bkod paḥi tshaṅs glu gsar sñan shes bya ba がそれで、この書は著者八十三歳のとき、一七八六年に書かれたものである。この書が知られるようになったのは、ロケシュ・チャンドラ氏 Lokesh Chandra がシャタピタカ Śatapiṭaka の第十二卷第二號として「ヴァイドゥーリアセルボ」Vaiḍūrya ser po の第二冊を出したとき、その末尾にこの書を付して出刊してからである。この書はロケシュ・チャンドラ氏のもとにある「スンバケンボ全集」の kha 部に十九枚のテキストとして收められている（Dpag bsam ljon bzaṅ III, ed. by Lokesh Chandra, Introduction xx）[1]。內容はチベット側の青海に關する古い傳承から始めて、その歷史を彼の著作の時代まで述べ、併せてジュンガルの歷史、塞外の地理、著者の跋などを付している。この中で特に當面の問題に資するのが、グシカーンの進駐前後からの青海の歷史に關する部分である。そしてこれによって我々は今まで全く知られなかった新しい事實の數々を學びとることができるのである。既にペテック氏 Luciano Petech はその名著 "China and Tibet in the Early 18th Century, Leiden, 1950„ の補遺として "Notes on Tibetan History of the 18th Century, T'oung Pao, vol. LII, Livr. 4—5, 1966„ を書いたとき、この書を參照して重要な事實を幾つか明らかにした。又我が國では山口瑞鳳氏がこの書を利用して、「顧實汗のチベット支配に至る經緯」（岩井博士古稀記念典籍論集、東京、昭和三十八年、七四一頁以下）を發表し、グシカーンのチベット征討のプロセスを詳細に述べている。この書が今やグシカーン及びそれ以後の青海・チベットの歷史の解明に缺くべからざる文獻であることはまちがいないが、その內容には宗敎的な表現も混り、決して容易に何人も近づき得る文獻ではなかった。

從ってこの書の飜譯は各方面から待望されていたが、遂に楊和瑨 Ho-chin Yang 氏によってその最初の試みが着手された。ここに紹介する本書が卽ちそれで、內容は序言（八頁）、ローマナイズしたテキスト（一八頁）、英譯（二二六頁）、註釋（四三頁）、參考文獻（六頁）、地圖（二頁）などから成り、全體で一二五頁程の冊子になっている。

楊氏はテキストの中頃の部分、全體の約四分の三に當たる歷史の部分を譯註したのであるが、その譯は槪ね正確で、特に宗敎的記述の部分は原典は甚だ難しい文章なのであるが、チベット人の學者の助力を得て、よく消化した譯をつけている。また歷史的記述の部分についても、テキストの飜譯だけでは理解しがたい點が多いので、それらのところは從來の諸研究ならびに中國文獻などを引用して丹念な註を付している。これによって本書は一層利用しやすい形で提供されたのであり、先ずは氏の勞苦に敬意を捧げるとともに、その

學界への寄與もまた少くないことを喜びたい。

しかし仔細に檢討すると、譯註の不充分な點、或は問題となる點がないわけではない。以下それを摘記して批判と考察を進めてみたい。

（一）二九頁。「トメットのホロチェ Ho lo che が彼の一族部下とともに暫くここ（青海）に住した」とある。ホロチェは Qulaci であろうが、楊氏はこれを蒙古遊牧記卷一二の火落赤とし、更に明史卷三二七外國傳韃靼の條に出るアルタンカーンの甥 grand-nephew に當たる人物だとしている。成程明史卷三三〇には火落赤はアルタンカーンの兄メルゲンジノンの孫セチェンタイジの弟として書かれ、北虜世系にも同樣な系統で合羅赤台吉と出てくる（和田清「東亜史研究」蒙古篇、東京、昭和三十四年、七二八頁參照）。同じく明史卷三二七には、彼が萬曆三十五年（一六〇七）ごろまで青海で活躍したことを述べている。しかし當面のホロチェを簡單にこの火落赤に比定してよいのであろうか。青海に活躍したホロチェにはこの他にユンシェブゥの大成台吉の弟啞速火落赤把都兒台吉があり、和田氏はこれが問題の火落赤だとする（和田前掲書六八一頁）。しかし氏の示す北虜世系による原圖では、この火落赤はセチェンタイジの叔父になり（和田前掲書六七四頁）、明史の記載と一致しない。そこに一抹の疑念が殘るのであるが、實はもう一人の火落赤が山口氏によって示唆されているのである（山口前掲論文七四四頁）。それは北虜世系に、ダヤンカーンの第四子我折黃台吉（アルスボロト）の系統として記されるもので、我折の子不只克兒台吉の子火落赤台吉と書されるものである（和田前掲書七〇九頁）。この系譜には彼について、

在陝州河州邊外莽揑川住牧、離邊約有半月之程、扁都口互市、萬曆十七年犯洮河、至今革除貢市矣。

と說明しており、これは明史卷三二七・卷三三〇に火落赤が莽剌・揑工の兩川に據って甘涼洮岷西寧間を屢々犯したとあるのと一致する。またその父の不只克兒台吉については「營名多羅土蠻」とあるから、これが青海に據ったドロントメット部 Dolo̧an tümed であることはまちがいない。とすると、以上三人の火落赤のうち、最後のドロントメット系の火落赤が最も可能性の多い火落赤となり、明史の記載はこの三人の事蹟を混淆して一人の人物としてしまったのではないかと疑われる。從ってこの問題は楊氏が和田・山口の兩氏の研究を參照されたならば、本譯本に書かれたような簡單な註釋では濟まされなかったであろう。

（二）三六頁。一六三六年にグシカーンは「イレ Yi le、タリム Tha rim、ヘータグ Has tag、大ダム H̱dam chen po を通って青海へ進駐した」とある。この地名のうち、ヘータグ以外は楊氏の比定通りである。しかしヘータグを楊氏は「比定できない」とする。このグシカーンの進軍路は明かにタリムからツァイダム沿邊を通ってココノールへの道である。故に Has tag は當然ガスノール（噶斯淖爾）Ｇasiru nayur の近邊の山であろう。tag というトルコ系の語からすれば、Has はガスのトルコ訛と考えてよいのではないか。噶斯路の重要性はここで說くまでもない。

（三）四一頁。「一六六七年に、青海のモンゴル軍は西寧城を圍んだが、中國の大軍がロンラン Groi lai に來たので、彼等は再び平靜に戻った」とある。このロンランを楊氏は「比定不可能」としているが、このことは聖祖實錄康熙六年（一六六七）八月辛丑

の條に、山西陝西總督盧崇峻の疏報として、「邊内住牧の番族が皆出口してしまったので、もとへ戻したい」とあり、更に冬十月乙未の條に同總督の報として「突發事故に備えるため、自分は莊浪に出動したが、ダライの命令で彼等が罪を認めて歸誠したので軍を歸したい」とある事件を指したものであろう。正確な事情は實錄の記事でも曖昧であるが、とにかくロンランはこれによって莊浪（甘肅省莊浪縣）に當てるべきであることが分る。

（四）四二頁。「青海地方のマチュ Rma chu の畔にある我が（＝スンバケンボ）生れ故郷のトリ Tho li は……」とあり、楊氏はこのトリの位置を説明していないが、十三排圖（または清代一統地圖、臺北、一九六六年、一二七頁）の蘭州府西寧府の圖によると、青海の南の黄河の屈曲するところに托里達巴漢（トリ峠）・托里布拉克（トリ泉）があるから、ここがその地であると考えてよい。確にマチュ（黄河）の畔であり、ここがスンバの生地となるわけである。そこで楊氏が疑っている通り（八二頁註一四七）、ダス Sarat Chandra Das がスンバの生地をゴンルン寺（西寧の東北所在）の近傍におくのは（Das, The Life of Sum pa Khan po, JASB, 1889, p. 37）當っていないことになる。ダスの當時にはゴンルンもまた黄河の傍に存したという程度にしか分っていなかったと思われるので、全くの誤というのも酷であろう。

（五）また右に關聯して、寺院の建てられたツァブチュ Tshab che がやはり楊氏では「不明」となっているが、これは青海東南邊の Cabciyar（恰不恰）で、第三代ダライとアルタンカーンとが會見した有名な地である。

（六）四六頁。一七一七年にジュンガル兵がラサを急襲した際のルートについて「レパ Dres pa、ナグツォン Nag tshoṅ、ラルガン Lha rgan を通ってダム Ḥdam に到達した」とある。ダム以外の地が「不明」になっているが、このうちナグツォンはナグツァン Nag tshaṅ の誤であり、十三排圖（一統地圖一四九頁）の拉薩・羅隆宗和屯の圖にテングリノールの西北に那克藏とあるところであろう。ナグツァンは通常の地圖では少し南のツァンポ河寄りの地方名としてその位置が考えられているが、その北限はこの邊まで含んでいるのかも知れない。ラルガンは同じく前掲十三排圖にテングリノールの東に拉爾甘達巴漢（ラルガン峠）とあるものに相違ない。レパは遺憾ながら不明である。

（七）四七頁。一七二〇年に第七代ダライが清軍とともにラサに入ったことを述べるが、清軍の筆頭に Prince Shi se tsaṅ cun chiṅ waṅ があり、楊氏が指摘する通り、康熙帝の子の允禵を指す。このチベット語の呼稱は奇妙であるが、直譯すれば「第十四皇子將軍親王」であろう。

（八）同頁に行をともにした「中國の支配者（＝皇帝）の大臣のアタハタ A ta ha ta」というのがある。楊氏はやはり「不明」とするが、滿洲語の Adaha bithei da（侍讀學士）の略された形であろう。この進駐軍とともにラサに入った侍讀學士は滿都であり、滿都はラサで同僚の巴特麻と不和になり、軍司令官のツェワンノルブを非常に困惑させた。二人の不和についてはペテック氏が既に注意している（前掲 China and Tibet, p. 73）參照。

（九）同頁下段に、同時に進駐を助けた青海ホショトの諸侯の名が連ねてあるが、

〔一〕「Dgaḥ ldan erte ni ju naṅ jun waṅ は Teḥi chiṅ

ho çu che である」と原註があるから、楊氏のいうごとく岱青和碩齊である（九〇頁）。しかし岱青和碩齊 Dayicing qosiγuci は稱號で、本名チャガンタンジン Cayan danjin（察罕丹津）の方が有名であるから、この名を出してほしかった。

〔一一〕 次の Er te ni er khi はエルデニエルケトクトネー Erdeni erke toqtonai で、雍正元年のロブサンタンジンの敗退後、彼に代って左翼の長となった人物である。

〔一二〕 Mer gen tehi chiṅ はグシカーンの第四子オンボ Ömbü の孫のメルゲンダイチン Mergen dayicing であろう（欽定外藩蒙古回部王公表傳〔以下表傳と略〕卷八一掲出）。

〔四〕 Hjigs byed skyabs は右のオンボの曾孫濟克濟扎布で、南右翼末旗の祖となった者である。

〔五〕 Dgaḥ ldan bkra çis はグシカーンの長子ダヤン Dayan の曾孫噶勒丹達什で、南左翼後旗の祖。この二人に關する楊氏の比定は誤っていないが、旗名を出してほしかった。

（一〇） 四九頁。雍正元年（一七二三）に起った青海のロブサンタンジンの反亂は從來その原因が明かでなかった。しかしスンバはここにラサンカーンの死を以てホショトのチベットにおける支配權が清朝に打切られたことに對する反感の高まりを述べている。これは我々に亂の背後關係を充分に考察する手がかりを與えるものである。この記述の重要性と亂の名が「ロブサンタンジンの亂」と呼ばれていることとはやはりはっきり指摘する必要があると思う。

（一一） 五三頁。ここにスンバは一七八六年（乾隆五十一年）における青海諸侯の名を多く擧げている。楊氏はその全部について何等考定するところがなかったが、二三を除いては比定可能であるので、それを左に簡單に說明しよう。

右翼について。

〔一〕 Waṅ Ṅag dbaṅ dar rgyas。前掲チャガンタンジンの曾孫で、親王納罕達爾濟と書される者であろう（表傳卷八二）。納罕は Naγan で、Ṅag dbaṅ のオイラート訛と考えられる。前頭旗。

〔二〕 Dsa sag Blo bzaṅ bstan ḥdsin。グシカーンの第五子イルドゥチ Ilduci の曾孫拉扎布の系統羅卜藏丹津。扎薩克一等台吉（表傳卷八八）。南左翼中旗。

〔三〕 Dsa sag Klu ḥbum。同じくイルドゥチの曾孫阿喇布坦扎木蘇の孫隆賁。扎薩克輔國公（表傳卷八七）。南右翼中旗。左翼について。

〔四〕 Waṅ Bsod nams rdo rje。グシカーンの第六子ドルジ Dorji の曾孫朋素克旺扎勒の孫索諾木多爾濟。多羅郡王（表傳卷八二）。西前旗。

〔五〕 Gaṅs kar waṅ。グシカーンの第三子ダランタイ Dalantai の子袞布の系統の剛噶爾。扎薩克多羅郡王（表傳卷八三）。前左翼頭旗。

〔六〕 Pi le Ḥjigs med ye çes。前掲ドルジの子薩楚墨爾根の系統の濟克默特伊什。扎薩克多羅貝勒（表傳卷八四）。西後旗。

〔七〕 Guṅ Dge ḥdun don grub。前掲ダヤンの第五子索諾木達什の系統の根敦端多布。扎薩克輔國公（表傳卷八六）。南右翼後旗。

〔八〕 Guṅ Chos skyoṅ skyabs。前掲ダヤンの末子墨爾根諾顏の曾孫吹鍾扎布。扎薩克輔國公（表傳卷八六）。北前旗。

〔九〕 Dsa sag Kun bzaṅ tshe riṅ。前掲オンボの孫納木扎勒の曾孫恭桑車凌。扎薩克一等台吉（表傳卷八四）。南左翼末旗。

〔一〇〕 Dsa sag Dpal ḥbyor。ドルジの曾孫額爾克巴勒珠爾の次子伊什多勒扎布の孫に當たる巴勒珠爾。扎薩克一等台吉（表傳卷八八）。北左末旗。

〔一一〕 Dsa sag Phyag rdor。前掲エルデニトクトネーの子車凌多爾濟の系統沙克都爾。扎薩克一等台吉（表傳卷八八）。南左翼次旗。

〔一二〕 Dsa sag Ban dhe。前掲オンボの孫納木扎勒の弟阿喇布坦の孫班第。扎薩克一等台吉（表傳卷八七）。西右翼前旗。

〔一三〕 Dsa sag Nor bu rin chen。前掲オンボの曾孫濟克濟扎布の曾孫諾爾布璘沁。扎薩克一等台吉（表傳卷八五）。南右翼末旗。

〔一四〕 Dsa sag Rdo rje。グンカーンの第四子アユシ Ayuši の末子扎布の曾孫車凌多爾濟であろうか。扎薩克一等台吉（表傳卷八七）。東上旗。

〔一五〕 Khur lugs be si Blo bzaṅ tshe brtan。グンカーンの第八子桑噶爾扎の孫索諾木達什の系統の羅卜藏色布騰。間散貝子（表傳卷八五）。

〔一六〕 Dsa sag Lha skyabs。前掲桑噶爾扎の子塔薩博羅特の系統の拉扎布。扎薩克一等台吉（表傳卷八五）。北左旗。

〔一七〕 Dsa sag Dge ḥdun skyabs。前掲オンボの孫額璘沁達什の曾孫根敦扎布。扎薩克一等台吉（表傳卷八七）。北右末旗。

〔一八〕 Tshas dam Dsa sag Dgaḥ ldan bstan skyoṅ。グンカーンの第七子瑚嚕木什 Qorumši の孫色布騰博碩克圖の玄孫噶爾丹丹忠。扎薩克一等台吉（表傳卷八八）。西右翼後旗。

〔一九〕 Dsa sag Chos btsun skyabs。グンカーンの弟色稜哈坦巴圖爾の曾孫哈爾哈斯の子吹忠扎布。扎薩克一等台吉（表傳卷八七）。西右翼後旗。

〔二〇〕 Dsa sag Bkra çis chos ḥphel。グンカーンの兄哈納克土謝圖の玄孫車凌納木扎勒の孫達什車木伯勒。公中扎薩克一等台吉（表傳卷九〇）。西右翼中旗。

〔二一〕 Jungar Pi le Chos skyoṅ skyabs。バトルホンタイジの子卓特巴巴特爾の系統の吹忠扎布。扎薩克多羅貝勒（表傳卷八三）。南右翼頭旗。ジュンガル系。

〔二二〕 Be si Ḥchi med zla ba。バトルホンタイジの子卓哩克圖和碩齊の孫阿喇布坦の孫齊默特丹巴とすれば、扎薩克固山貝子（表傳卷八六）。北中旗。但し名の「丹巴」が正しければ、zla ba は bstan pa であろう。ジュンガル系。

〔二三〕 Ho de Guṅ Rta mgrin。ホイト部の祖卓哩克圖和碩齊の孫貢格の曾孫達瑪璘。扎薩克輔國公（表傳卷八六）。南旗。Hode は輝特部 Qoyid の意。

〔二四〕 Thor gwod Dsa sag Dkon mchog。トルゴート部の祖、貝果鄂爾勒克の弟翁貴の曾孫阿勒達爾の系統の袞楚克。扎薩克一等台吉（表傳卷八九）。南前旗。トルゴート系。

〔二五〕 Dsa sag Sgrol ma skyabs。前掲阿勒達爾の兄阿玉什の玄孫都勒瑪扎布。扎薩克一等台吉（表傳卷八九）。南後旗。トルゴート系。

〔二六〕 Dsa sag Ur rgyan。前掲貝果鄂爾勒克の子保爾阿噶勒琥の弟莽海の孫格埒勒圖の玄孫烏爾占。扎薩克一等台吉（表傳

巻八九)。西旗。トルゴート系。

〔一一七〕 Dsa sag Bsam ḥgrub rgya mtsho。前掲保爾阿嚕勒琥の曾孫索諾木喇布坦多爾濟の曾孫薩木都布扎木素。扎薩克一等台吉(表傳巻八九)。南中旗。トルゴート系。

〔一一八〕 Hal ha Dsa sag Tshe thar。外蒙カルカの祖ゲレセンジェの末子鄂特歡諾顔の子多爾濟阿喇布坦伊勒登の系統の車德爾。公中扎薩克一等台吉(表傳巻九〇)。南右旗。カルカ系。アラシャンについて。

〔一一九〕 Ho ci Chin wań Dbań chen dpal ḥbar。グシカーンの第四子アユシの子和囉理の系統の旺沁班巴爾。扎薩克和碩親王(表傳巻八〇)。

他について。

〔一二〇〕 Guń Rdo rje tshe brtan。グシカーンの第七子瑚魯木什の孫達什惇多布の玄孫車爾登多爾濟であろうか。とすれば扎薩克固山貝子で(表傳巻八五)、北右旗であるが、「公」とあるのが一致しない。暫く疑を殘しておく。

(一一) 六〇頁註二三にカルマパの説明があるが、これはカルマパのうちでカルマシャマルパ(紅帽派)Kar ma shwa dmar pa であることを明記すべきである。カルマパの略史については楊氏が一〇三頁に擧げるがごとくリチャードスン氏 Hugh E. Richardson の "The Karma-pa Sect, JRAS, 1958" が重要な文獻である。ただ楊氏はこのリチャードスン氏の文獻は Pt. I のみで Pt. II, JRAS, 1959 を擧げていないのは理解できない。特にこの後者の最後には、カルマパ四派の歷代活佛の表が付されていて頗る有用だからである。

以上は氣のつくままに補註の形で細かいことを述べたが、全體として見るとき、文獻の利用についても未だしの感がなきにしも非ずである。例えば「參考文獻Ⅰチベット史料」のところを見ると、一般的なチベット文獻は記されているが、第五・六・七代のダライラマの傳記、第二・三代パンチェンラマの傳記、ポラネー Pho lha nas の傳記などは擧げられていない。また「Ⅱ中國史料」には基本的なものとして明史・清史稿・東華錄・皇朝藩部要略・聖武記などが一應擧げられてはいる。しかしより根本的なものとして、現在では明實錄・清朝實錄が利用さるべきで、平定準噶爾方略・西域同文志・外藩蒙古回部王公表傳も缺くべからざる筈である。地圖としても清十三排圖が當然參照されるべきであった。ペテック氏が一九五〇年に前掲 "China and Tibet" を書いたときの成功の一斑は清朝實錄を利用したことであったし、同じく前掲 "Notes, TP, 1966" を書いたときには藩部要略・同文志を利用して多大の效果を擧げたのである。いわば研究の水準は一應定まっているのであり、楊氏は中國文獻にも明るい筈であるから、この點は一層の努力を傾けてほしかった。日本の文獻でも明代蒙古に關しては、前掲の和田氏の大著「東亞史研究」蒙古篇が劃期的な研究であるし、四オイラートに關しては羽田明氏の幾多の優れた論考があり、參照されるべきであった。

右は思うに任せて率直な批判を行なったものであるが、この書の學界への寄與の大きさを考えると、右に述べたことは細微な瑕瑾ともいうべきものかも知れない。氏の勞苦を思うとともにこの書の出刊を心から歡迎し、前途有爲な新しいチベット學者が出現したことを同學の士とともに喜びたいと思う。

(佐藤 長)

註

① 「スンバケンボ全集」の版木は歸綏（厚和市）の北のウスト召にもあり、その目錄は長尾氏によって早くから紹介されていた（長尾雅人「蒙古學問寺」京都、昭和二十二年、三一八頁以下）。しかし不思議なことにその中には「青海史」は見當らない。

附記 本文のチベット語のローマナイズは寺本式であり、楊氏のそれとは異なっていることを了承願いたい。

追記

（一）右註①にウスト召目錄に「青海史」が見當らないことを述べたが、本文にいうごとくロケシュ・チャンドラ氏の紹介したスンバケンボ全集の目錄khaの部には明らかにその書名が記載されている。一方楊氏はそのもとのテキストが求め得ないからといって、ロケシュ・チャンドラ氏編纂の Śatapiṭaka Vol. 12 (2) のそれをテキストに用い、ペテック氏も同樣このテキストを用いて研究の材料にしている。とすれば、アメリカにもヨーロッパにもこの書のもとの版本は存在しないように思われる。ところがこの書の版本が實は日本の京都に存在していたのである。卽ち一九七〇年十二月六日に、大谷大學の當番で、東本願寺同朋會館において、本年度の日本西藏學會が行われた。その席上、大谷大學の片野道雄氏は、谷大に藏せられる藏外文獻の數々を紹介せられたが、中にスンバケンボの全集があり、それは多少の缺頁はあるが、ロケシュ・チャンドラ氏の目錄に一致することを述べられたのである。そこで私は直にそれに「青海史」が含まれているかどうかを質問したのであるが、後日氏の再調査により、この「青海史」が一枚も缺けることなく存在していることを知らされたのである。これは實に驚くべきことで、我々はシャピタカ本の據ったテキストを遂に我が國で見ることができるようになったのである。またこのスンバ全集には例のパグサムジョンサンがそのまま含まれているというから、パグサムに關しても我々は、ダス氏 S. Ch. Das が一九〇八年に出刊した、ミスプリントの多い、不完全なテキストよりも一層正確なもとの版本を見ることができるようになったのである。谷大では目下目錄を作成中であり、七一年には出版の見込であるというから、我々はその完成を心から期待すると同時に、兩書の我が國における發見を、同學の士とともに慶びたいと思う。なおこの兩書について、片野氏が再三精査の勞をとられたことについて厚く感謝の意を表したい。

（二）本書評校正中に、新に出版された "Zahiruddin Ahmad, Sino-Tibetan Relations in the Seventeenth Century, Serie Orientale Roma XL, Rome, 1970" を西田龍雄氏の好意で見るを得たが、これは、著者は「公的な記錄のみによる」といってはいるが、中國・チベット兩國の文獻を自在に驅使し、現在では最高のレベルで書かれた歷史研究書である。當然「青海史」も氏自らの翻譯で、中に利用されているが、楊氏の譯と比較檢討されるべき點も少くないようである。本書評での利用は時間的に間に合わなかったのでここには觸れないが、一應この書が出版され、參考に資する點が多いことを紹介しておきたい。